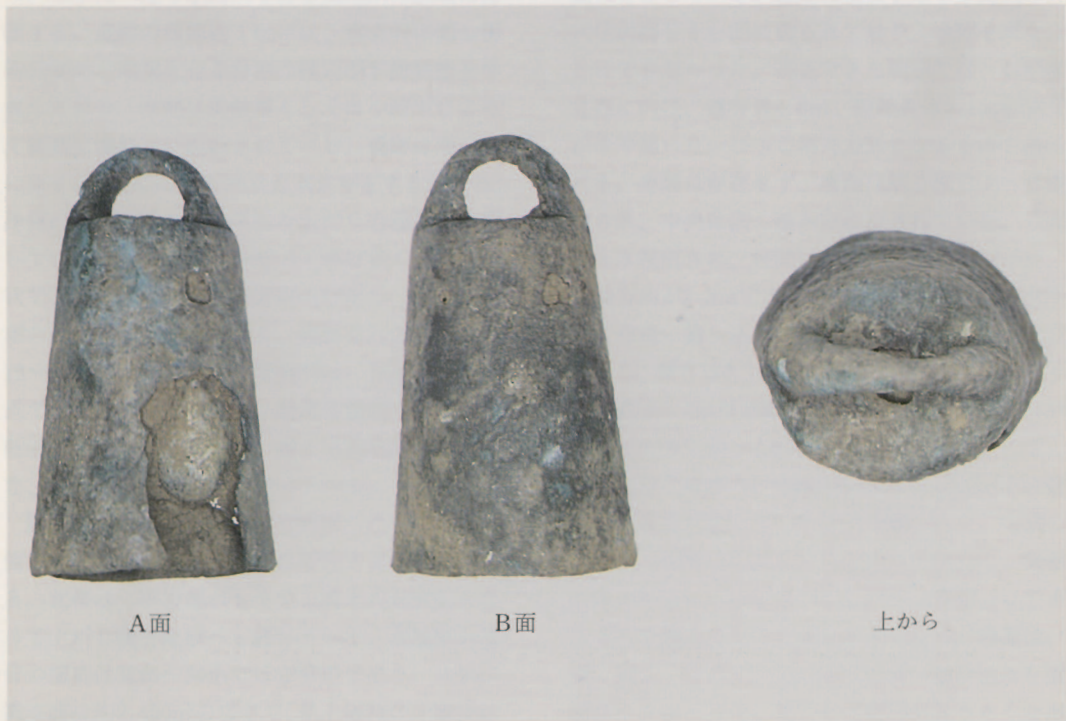




小銅鐸出土状況



A面

B面

上から

小銅鐸 (縮尺不同)

# 木更津市中越<sup>なかがし</sup>遺跡出土の小銅鐸について

麻生正信、土屋治雄、加藤正信

## 1. はじめに

中越遺跡は、木更津市大久保字中越他に位置し、東関東自動車道千葉富津線の建設工事に先立って平成6年1月から平成6年5月まで発掘調査を実施した。遺跡は先土器時代から中世までの遺構・遺物が検出・調査されたが、それらの中でここに紹介する小銅鐸の検出は特筆すべき遺物の出土であり、整理作業の着手がかなり先になると見込まれることから、ここに遺物取り上げ時の状況で、小銅鐸のみを資料紹介として取り上げた次第である。正式には整理作業終了時の本報告によって公式なものとするため、それまでの取り急ぎの資料紹介とさせていただきますをお断りする。

## 2. 遺跡の環境・概要

中越遺跡は、木更津市街地から約3km南へ隔たり、東京湾へ注ぐ小河川である烏田川の流域に位置する。遺跡の西側約1kmには、東京湾に面し房総丘陵の北端部となる台地の縁辺部が海蝕崖を形成しており、台地は海蝕崖もしくは小河川によって複雑に樹枝状に開析されている。遺跡は烏田川に面する台地の中でも独立丘状に存在する台地の、南東向きの中段のやや平坦な広がり部分に位置している。独立丘状の台地の上部は狭く痩せ尾根状で、頂上部には中越古墳群が存在し、5基の円墳の所在が確認されている。開析された谷は標高15~20m前後で、遺跡は標高30m、丘陵上は最高点で標高55mほどである。南側は遺跡の平坦面を鞍部として斜面を上がり、痩せ尾根状の台地が続き、さらに丘陵基部へと続いている。

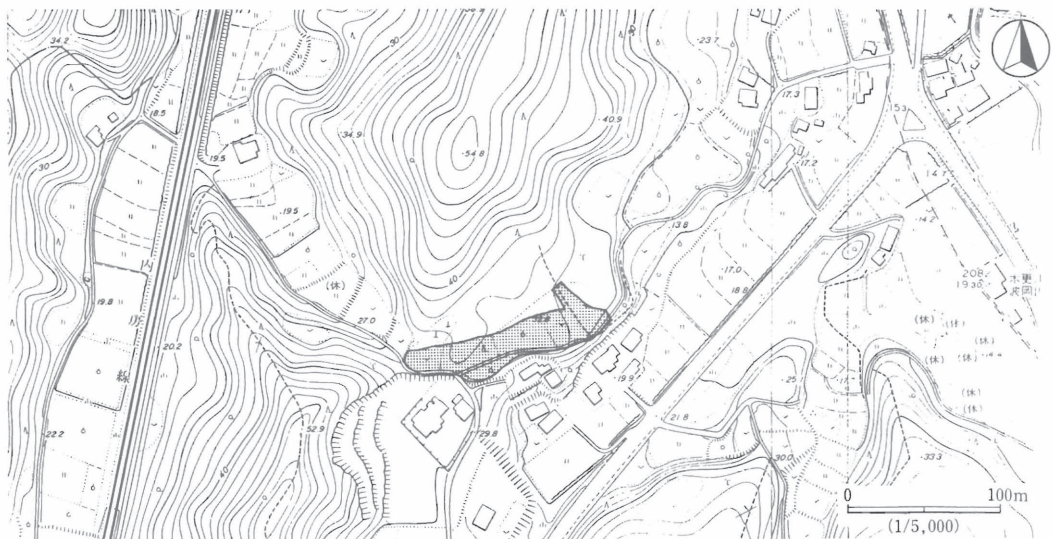
調査区は、丘陵斜面途中の南面した平坦部で南側はすぐに斜面となり水田の存在する谷津へと至る。北側は、平坦部がもう少し続き丘陵斜面となって上がり痩せ尾根へと続いている。調査区の部分の標高は32m~34mでほぼ平坦である。今回の調査区は約3,400㎡の広さで、先土器時代の遺物出土地点5か所、縄文時代早期の包含層・礫群、縄

文時代中期の埋甕1基、弥生時代の竪穴住居跡1軒、古墳時代前期~中期の竪穴住居跡13軒、古墳時代後期の竪穴住居跡2軒、平安時代の竪穴住居跡14軒、古墳時代後期の掘立柱建物跡6棟、平安時代の掘立柱建物跡1棟、中世の掘立柱建物跡1棟、中世の溝、道路各1条が検出・調査された。それらの中でS I-19と名付けた竪穴住居跡(第2図)の覆土最上層(ほとんど遺構確認面と同レベル)で、遺構検出のための精査中に小銅鐸が1点検出された。

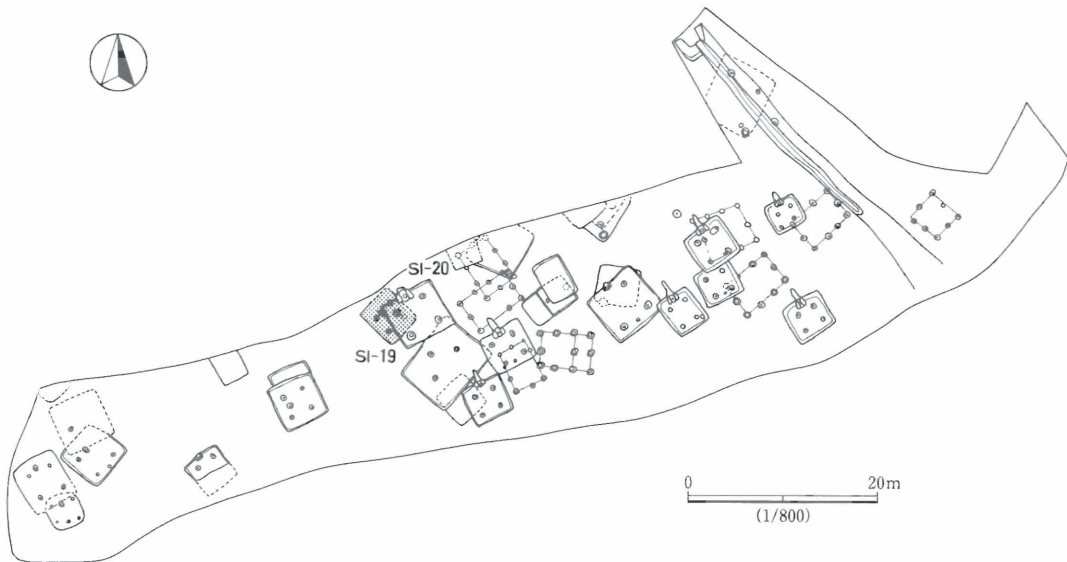
## 3. 小銅鐸検出の状況

竪穴住居跡S I-19(第3図)は、調査区ほぼ中央北寄りに位置し、一部は調査区外になっている。調査区中央やや東寄りに遺構の密度の高い部分があり、その密度の高い部分の西端にあたる位置に存在している。遺構は重複する平安時代の竪穴住居跡S I-20に切られており、全容を窺うことはできなかった。調査できた範囲では、長軸を北西に向け、遺存長4.8m、短軸長は4.4mの東側がやや開いたびつな隅丸方形になるものとみられる。壁溝は存在せず、床面は貼り床によって構築され、中央は固く踏み固めがされていた。柱穴が4本検出され、柱間は長軸方向が1.9~2.0m、短軸方向が2.3mであった。北西の柱穴のすぐ壁寄りには浅い掘り込みがあり、0.85×0.7mの長方形を呈し、深さは0.1mほどであった。その貼り床下には直径0.4mほどの小ピットが1基みられた。炉は検出できなかったが、S I-20に破壊されてしまったのであろう。床面には焼土と炭化材片が散乱し、火災にあっていることが窺われた。北西の隅には土器群が床面からまとまって出土し、形態も完形に近いものが多いことから土器群としてまとまって置かれていたものとみられる。器種は、甕、器台、罎等で、先に述べた浅い掘り込みを置場所とするような、何らかの関係がありそうな出土状況である。これらの出土土器から8点を選ん





第1図 中越遺跡位置図及び周辺地形図



第2図 中越遺跡遺構配置図

で実測図を掲載する(第4図)。これらの土器からみると、本遺構の時期は古墳時代前期のものともてよからう。

小銅鐸の検出は偶然に近いものがあった。S I - 19は重複する遺構があり、平安時代の竪穴住居跡 S I - 20によって切られているため、まず S I - 20の調査に着手し、覆土の掘り下げ、遺物の取り上げ、床面の検出・精査を行い、壁の精査・確定を行っている際に S I - 19の部分から小銅鐸は検出された。S I - 20の壁の精査の際に、S I - 19との境界部分の精査を実施し、写真撮影等のため S I - 19の覆土上面を清掃したときに、覆土の上面から顔を見せた緑青色の金属器が小銅鐸であった。青銅器の検出によって周囲を清掃し、細かく精査していったところ、小銅鐸が姿を現した。鈕を水平方向にした横位で、上面は一部破損し、破片が内面に落ち込みやや内側へ窪んでいるようで上面からの外圧によるものとみられた(写真図版参照)。

小銅鐸の検出によってその周囲の掘り込みの有無、共伴する遺物等の検出を鋭意行ったが、覆土の差異も認められず、共伴遺物の検出もないため、単独での覆土最上層への流れ込み状態での検出と判断された。小銅鐸の出土状況は、先述の S I - 19の床面からまとめて出土している土器群とは明らかに覆土の層序が異なり、焼土層の上の黒色

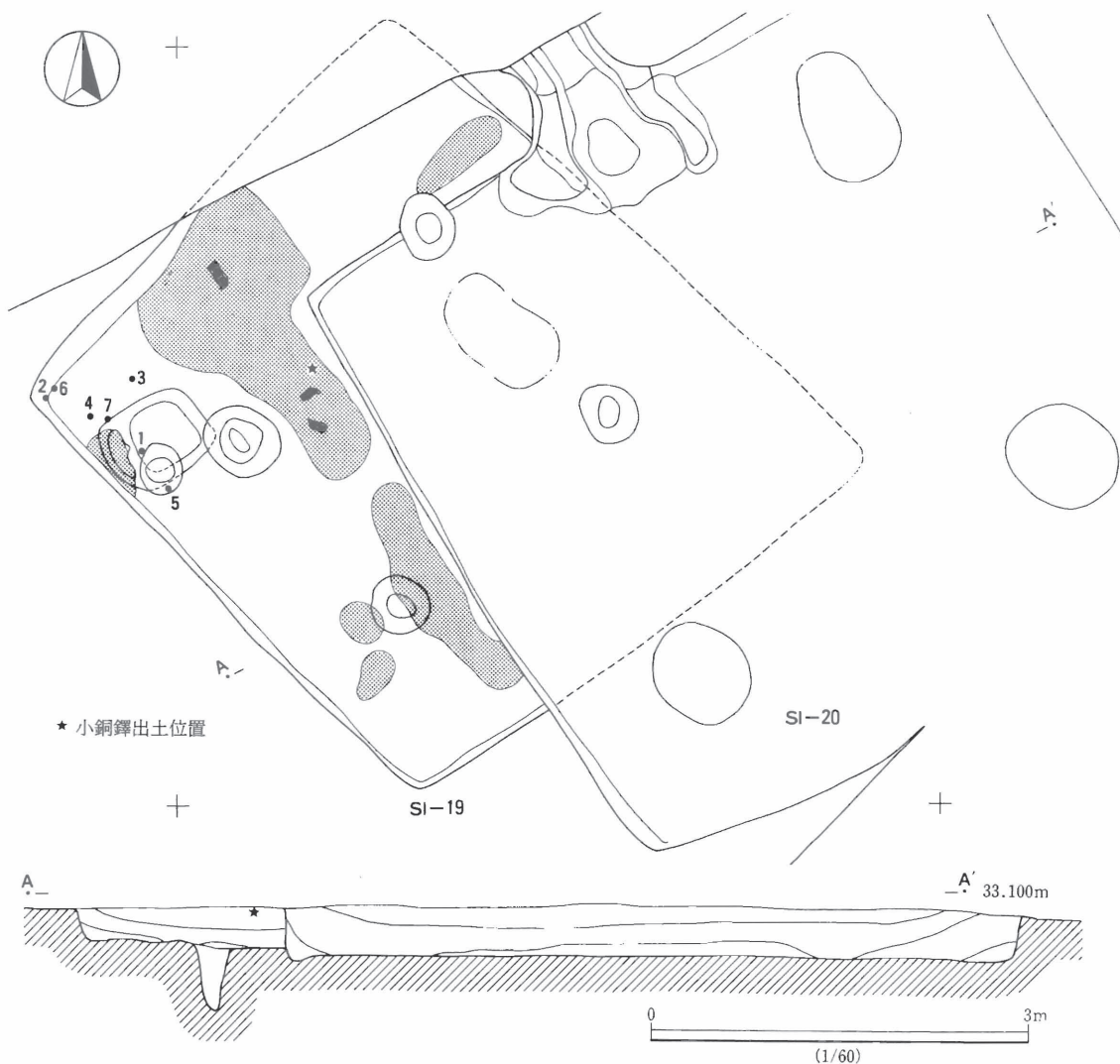
覆土層中からの出土状態であるので、竪穴住居跡 S I - 19の廃絶後にかなり住居跡が埋没した時点で小銅鐸が廃棄・流入等によってそこへもたらされたと考えてよからう。

#### 4. 小銅鐸について(第5図)

小銅鐸は、説明の都合上出土時の上面をA面とし、反対側をB面とする。A面の裾から鈕に向かって一部を破損した状態で検出したため、その周辺部が破損時に内湾し変形しているが、それ以外は形状の遺存は良好である。ただ全体に緑青による錆化が進み脆弱な状態であったため、出土時から直ちに錆の進行を止めるためのBTA溶液の塗布を行った。その後、鐸身内の覆土の取り出し等の作業を当文化財センター資料課保存処理担当の森恭一氏に依頼したため、作業着手前の出土時の状況での遺物の説明とさせていただく。今後、資料課の森氏によって遺物のX線撮影、鐸身内の覆土除去、保存処理等が行われる予定であり、作業終了後の小銅鐸の詳細、解釈等については整理作業終了後の本報告の際に行えればと考えている。

小銅鐸は全体的には遺存状態は良好で、青銅製で表面・内面共に緑青色である。鈕は錆によりやや痩せて細くなったようである。全高は6.35cm、鈕の高さは1.25cm、鐸身高は5.1cmである。鐸身上端部(舞部)は、長径2.55cm、短径2.15cmの楕円

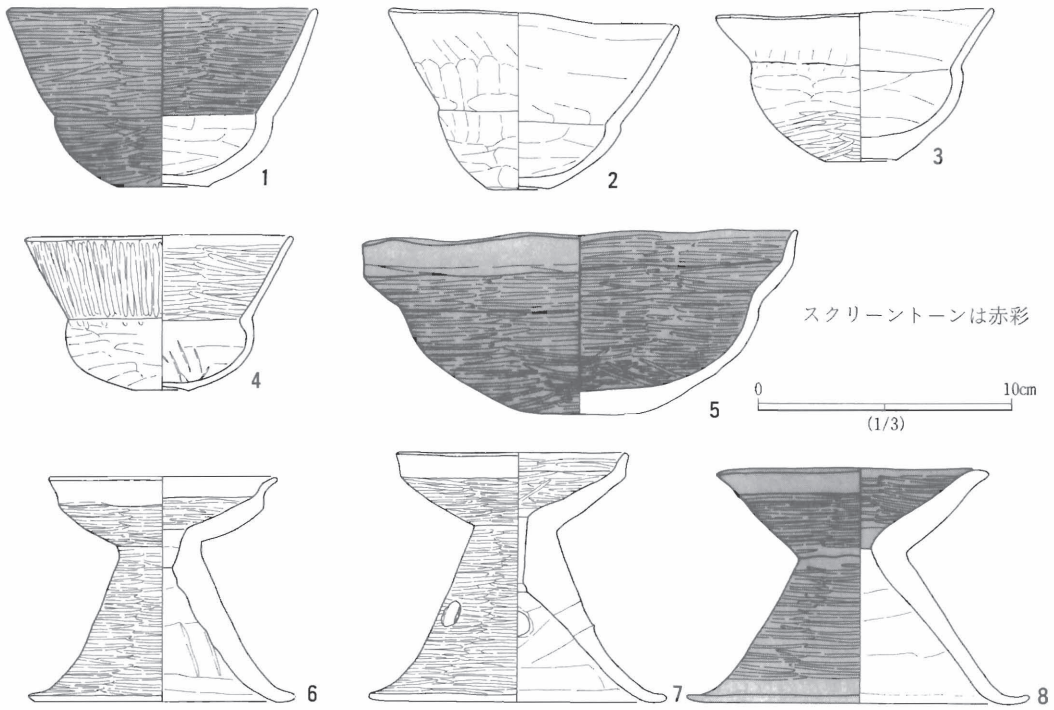




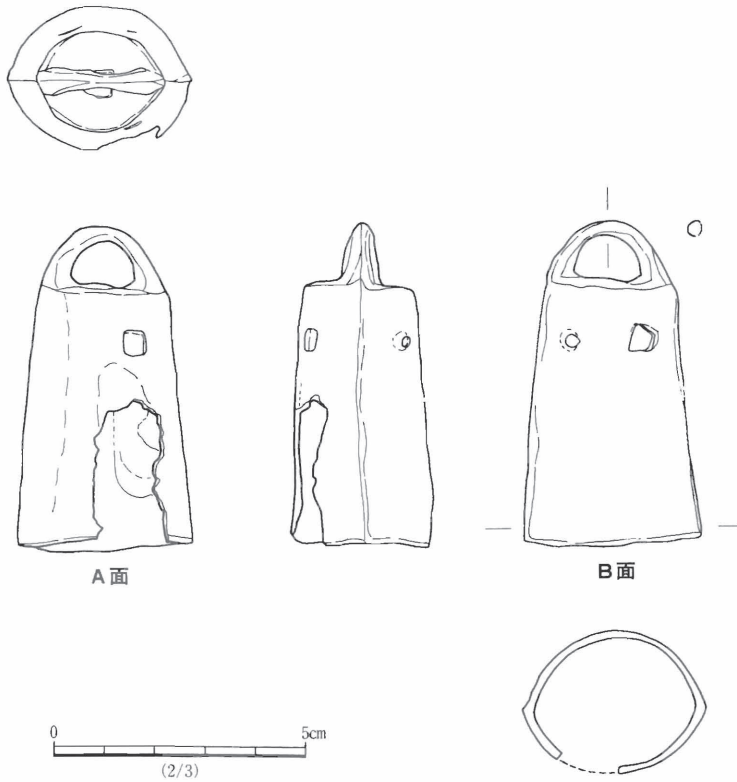
第3図SI-19平面図

形である。鐸身下端部(裾部)は長径3.6cm、短径2.8cmの両端のやや尖った長楕円形を呈する。鈕はほぼ半円形状にめぐり、鐸身の側縁はほぼ直線状に鈕から開きながら続く。鐸身の側縁はやや稜をもっているが鱗はない。鐸身の厚さは約1~2mmである。鈕の断面は、上部では円形で上端の太さ約3mmで、両端の鐸身部に続く部分は外面にやや稜をもち、ゆがんだ菱形になっている。太さは約4~6mmである。鈕の上部は錆のためか使用の際の懸垂による磨耗のためかやや細くなっているが、下側からの磨耗はあまり認められずA・B面側の外面と上部が細くなっているように観察されるので、錆による外側からの破損であろう。

A面は先述の検出・出土時の破損による変形がみられ、裾の部分がやや内屈している。表面はほぼ平滑で、文様等は認められない。B面は破損等もなく遺存状態も良好で、平滑でA面同様に文様等は認められない。型持孔は、A面の右側に1孔とB面に2孔が認められるが、本来の大きさのものはA面右側のものとみられ、1辺4.5mmの正方形である。それ以外のB面の左側のものは小さく形態も円形で、直径約2mmほどで、右側のものはゆがんだ台形を呈し、5×4mmほどである。ゆがんだ型持孔・存在が確認されない型持孔は、鑄造時の溶銅の湯が型持孔の部分にまで回り込んで塞いでしまったものとみられる。舞孔は鐸身上部ほぼ



第4図 SI-19出土遺物



第5図 小銅鐸実測図 (保存処理前状況)

中央に1孔みられ、形状はほぼ正方形で一辺約5～6mmである。舌等の釣り下げの痕跡は認められなかった。鐸身の内面には裾部に近く内突帯が一条認められるが、覆土の充満のため詳細は不明である。

鐸身の中には覆土が充満しているが、その覆土の中に長さ2.6cm、幅1cmほどの楕円形の小礫が一部顔を見せている。この小礫の位置と形態から、それがいかにも鐸身内に懸垂されていた舌の様にも観察されるが、現段階では舌であるともないとも断定はできない。今後の覆土の取り出しによって礫の形態・釣り下げのための糸・紐等を縛る孔・抉れ・痕跡等が認められるか否かによって判断をしたい。

## 5. おわりに

ほぼ偶然に近い状態で検出された小銅鐸であるが、今までの県内での小銅鐸の検出例は本例を含めて8例を数え（市原市草刈遺跡 2例、市原市川焼台遺跡 2例、市原市天神台遺跡 1例、袖ヶ浦市文協遺跡 1例、君津市大井戸八木遺跡 1例、木更津市中越遺跡……本遺跡例）、現時点では市原市を主とし、そこから君津市にかけての西上総地方を中心として出土する傾向が窺われる。また出土状態からみると、はっきりとした遺構に伴うものは少なく、副葬品として埋葬され、人為的に最終の用途として使用され機能的に終結していると考えられるのは、土坑に副葬された、袖ヶ浦市文協遺跡・君津市大井戸八木遺跡、市原市草刈遺跡H区の3例である。他の例は、ここに紹介する中越遺跡と同様に覆土への流れ込みや、単独出土とみられ、小銅鐸の機能・用途を考える際の参考となるような出土状況を呈していない。今回の出土例も、小銅鐸そのものの時期、機能・用途を推察するのに必要・十分な資料とは到底言えない。小銅鐸の出土例の増加にも関わらず、その用途等については不明な点ばかりが目立ってきてしまっている。小銅鐸はその祖形とされる銅鐸と同様に、日常・普遍的な機能・用途のものとは考えがたく、やはり何らかの特殊な用途のためのもの

であったと考えたい。特殊な用途とは、銅鐸に知られる様に祭器としての埋納による用途・機能の終結ということも考えられるが、一方では伝世による機能・用途の継続・継承も行われたと考えられる。県内の小銅鐸の出土例から見ると、副葬というはっきりした用途が認められる一方で、埋納よりも継承等に重点が置かれ、ある時期以降になると機能・用途の失効により不要となって廃棄されたり（本遺跡例を現段階ではこのように解釈したい）、貴重な地金として鑄潰して再利用するなどの用途で転用されていったりした例も考えられよう。いずれにせよ現在までに判明している出土状態例からでは、小銅鐸の機能・用途を推し量るのに有効な資料は、墓坑の副葬例として3例しかないといえるだろう。

今後、小銅鐸の機能・用途に有効な資料の検出例が増加することを望むと共に、今までの資料についても、新しい視点からの再検討をしていかなければならないだろう。（H6, 8, 30）

## 主要参考文献

- 榎原弘二、山口典子 「市原市川焼台遺跡出土の小型銅鐸について」 『研究連絡誌第7・8合併号』（財）千葉県文化財センター S59
- 相京邦彦、白井久美子、金子進 「川焼台遺跡出土の2号銅鐸について」 『研究連絡誌第15・16号』（財）千葉県文化財センター S61
- 浅利幸一 「千葉県市原市天神台遺跡出土の小銅鐸」 『考古学雑誌』第68巻第3号日本考古学会 S58
- 白井久美子、福田依子 「千葉県市原市草刈遺跡出土の小銅鐸」 『考古学雑誌』第75巻第2号日本考古学会 H1
- 相京邦彦 「千葉県市原市川焼台遺跡出土の小銅鐸」 同上
- 古内茂、西口徹 「千葉県袖ヶ浦町文協遺跡出土の小銅鐸」 同上
- 「大井戸八木遺跡」 『君津郡市文化財センター年報9』—平成2年度—（財）君津郡市文化財センター H3